様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月２７日現在

機関番号：　24403
研究種目：　若手研究（Ｂ）
研究期間：　2008～2010
課題番号：　20720122
研究課題名（和文）　明治期国学者の日本語学史的研究

研究課題名（英文）　A Historical Study on Japanese Nativists in the Meiji era

研究代表者
山東　功（SANTO ISAO）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：10326241

研究成果の概要（和文）：富士谷成章や本居宣長、本居春庭といった近世国学者の言語研究については、明治以降の国語学史の研究分野において、すでに多くの研究がなされているものの、近世国学と明治期とを繋ぐ時期の研究については、未だ十分に解明されていない実態が存在すると言えることから、明治期国学者の言語研究について日本語学史的に精査し、その研究史的意味についての検討を試みた。

研究成果の概要（英文）：There are a lot of studies on the language research of Japanese Nativists (Kokugaku-sya), for instance, Fujitani Nariaki, Motoori Norinaga, and Motoori Haruniwa. However, many study results of Japanese Nativists in the Meiji era, like Kurokawa Mayori, Ochiai Naobumi, and Konakamura Yoshitaka, are not understood well. Then, their study results on Japanese Nativism, especially, Japanese language studies, were investigated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：国学、日本語学史

１．研究開始当初の背景

富士谷成章や本居宣長、本居春庭といった近世国学者の言語研究については、明治以降の国語学史の研究分野において、すでに多くの研究がなされている。また、近年では国民国家形成期の学知を問うという観点から、明治以降の近代国語学成立時期に関する言語研究についても言及がなされるようになってきた。申請者も近世国学の言語研究については、山東　功（2003）「語の断続」（『文莫』25、鈴木朖学会）において鈴木朖の活語研究を、また明治以降の国語学については山東功（2002）『明治前期日本文典の研究』（和泉書院）や文化庁編（2005）『国語施策百年史』（ぎょうせい）などで近代国語学成立史を検討している。

しかしながら、例えば今日の学校文法で、十品詞分類の項目の中で名詞を「体言」、動

詞を「用言」とも呼ぶことがあるにもかかわらず、明治以降の言語研究が近世国学における言語研究の成果をどのように継承し展開していったのかについて、本格的に検討したものはあまり見受けられないように思われる。さらには、現代でも一般社会で時折主張される恣意的な語源解釈についても、それらの解釈が幕末・明治期の音義言霊派国学者の言語研究の中に見出されることは、あまり言及されていない。

すなわち、近世国学と明治期とを繋ぐ時期の研究については、未だ十分に解明されていない実態が存在すると言えるのである。具体的には、明治初期に活躍した、平田鉄胤や権田直助、堀秀成といった音義言霊派国学者の言語研究などがこれにあたる。また明治前期には、意外にも多くの鈴屋門流文法書が、主として地方の国学者の手によって刊行されている。さらには、近代西洋化の流れを受けて言語学を本格的に受容してからも、近世国学の言語研究を展開させていった、黒川真頼、物集高見、本居豊穎などの帝国大学関係者の言語研究も同様である。つまり、明治期に活躍しつつも、その後の近代西洋化の中で埋没した、明治期国学者の言語研究について、その言語研究史的意味を十分に検討する必要があると言えるのである。

そこで、明治期国学者の言語研究について、研究が進んでいる維新史学や神道史学の分野のみならず、言語研究の分野から精査するといった、本格的な検討が必要であると思われる。具体的には、これまで神道史学的研究との交渉があまり見受けられなかった権田直助の言語研究や、逆に神道史学ではあまり言及されなかった堀秀成、落合直文の言語研究などを中心として活用研究や音義説、神代文字論などを日本語学史的に精査し、その研究史的意味について検討を試みる。

また、文法研究の分野ではその存在が知られているものの、『国学者伝記集成』や『和学者総覧』においても、ほとんど見るべき記述のない阿保友一郎や旗野十一郎といった地方教育者として活躍した国学者に関して、年譜考証ならびに国語教育史上の影響関係について考察を行う。

さらに、大国隆正や鶴峯戊申といった幕末期の国学者が常に蘭学を意識していたように、明治期国学者も近代西洋化の流れについて敏感に反応していたという事実をふまえ、明治期国学者がいかに西洋移入の言語学と対峙してきたのかについて、研究史的に考察を行う。これは国学者が著した折衷文典や音義書の分析を、批判対象となった研究と比較することが挙げられる。具体的には、谷千生のチェエンバレン批判や、林甕臣の語源研究に対する新村出の評価などを分析することで、ほとんど顧みられることのなかった明治期国学者の言語研究の研究史的位置付けが可能となるものと思われる。

２．研究の目的

明治期国学者の言語研究については、研究が進んでいる維新史学や神道史学の分野のみならず、言語研究の分野から精査するといった、本格的な検討が必要である。具体的には、これまで神道史学的研究との交渉があまり見受けられなかった権田直助の言語研究や、逆に神道史学ではあまり言及されなかった堀秀成、落合直文の言語研究などを中心として活用研究や音義説、神代文字論などを日本語学史的に精査し、その研究史的意味について検討を試みる。

また、文法研究の分野ではその存在が知られているものの、『国学者伝記集成』や『和学者総覧』においても、ほとんど見るべき記述のない阿保友一郎や旗野十一郎といった地方教育者として活躍した国学者に関して、年譜考証ならびに国語教育史上の影響関係について考察を行う。

さらに、大国隆正や鶴峯戊申といった幕末期の国学者が常に蘭学を意識していたように、明治期国学者も近代西洋化の流れについて敏感に反応していたという事実をふまえ、明治期国学者がいかに西洋移入の言語学と対峙してきたのかについて、研究史的に考察を行う。これは国学者が著した折衷文典や音義書の分析を、批判対象となった研究と比較することが挙げられる。具体的には、谷千生のチェエンバレン批判や、林甕臣の語源研究に対する新村出の評価などを分析することで、ほとんど顧みられることのなかった明治期国学者の言語研究の研究史的位置付けが可能となるものと思われる。

最終的には、こうした明治期国学者の実相を総合的に把握できるよう、とりわけ看過されている明治前期の国学者が著した言語研究関係文献や墓標・顕彰碑銘文等をデータベースとして整理し、より重要と思われるものについては影印・翻刻等による公開を目指している。

３．研究の方法

日本語研究の歴史的伝統と、その成果の正確な継承は、研究者個人の問題を超えた歴史的使命として考えられる。しかし今日散見される、最初に結論ありきの評論的言語論では、結局は実証的研究を無視している以上、議論の説得性に欠けるきらいがある。例えば、明治期国学者に関しては「最後の国学者」として三矢重松、山田孝雄らの名がよく挙がるものの、他の国学者の言語研究とはいかなる関係にあったのかについてはあまり詳らかになっていない。ましてや何をもって「国学者」と称し得るのかの検討はほとんど見られな

い。山田が、その不十分な説明から国語学を志す契機となったという、関根正直の『普通国語学』をとってみても、黒川真頼に国学を学んだ関根の学説自体が、十分実証的に言及されているとは言い難い現状である。

また、国学関係文献所蔵機関として名高い國學院大学、皇學館大学、神宮文庫でさえ明治期刊行の国学関係書については十分な整理があまりなされておらず、おそらくは把握できる範囲でも百数十名は存在すると思われる明治期国学者の全貌に関する言語研究史的解明は必須であると思われる。

その上、明治期の国学関係刊行書は近世刊本・写本などと比して所蔵機関でも余り重要視されていなかったことから、中には史料の劣化がはなはだしいものも存在する。特に時局柄、国学史に関係する伝記等の刊行は『国学大系』のように昭和前期に集中しているが、そうした二次文献ですらも今日では資料劣化が進んでいる。明治前期については、ようやく一部の文法書が復刻されつつあるものの、明治期国学者の言語研究の全体像からすれば極めて僅かであり、緊急性は絶対である。本研究は、こうした喫緊性の問題をふまえつつ、明治以降の主要な国学者に関する文献調査を行うとともに、その具体的な実態を広く近代国語学成立史の観点から全体を定置するという、いわば言語思想史的方法論によって考察しようとするものである。さらに具体的な文献については、関係機関との連絡や許諾をとりながらテキストファイル等によってデータ化することで、研究史料としての利用簡便性への配慮を試みる。

本研究は明治期国学者の著述に関する文献学的実証研究と、明治期国学の実相という維新史・神道史的研究とを、近代国語学成立の前哨という言語思想史的見地から統合する、極めて学際的かつインターフェイスな日本語学史的研究と位置付けられる。こうした、明治期国学者に注目した近代国語学成立史の本格的な研究は、本研究が嚆矢であるといえよう。

さらに、本研究は従来の結論先行型の国語学成立史研究に対し、極めて実証的な文献学的検討を加えることで、日本語研究と明治期の諸国学思想との関係を、極めて精緻に位置付けることができるものである。このことは、一方的な評論に陥りがちであった研究史を、より浩瀚な研究分野として再構成し得るものとなり得よう。しかも、言語思想史的背景を重視するという日本語学史的方法論を採用することにより、言語学的にも、偏りのない穏当な記述が期待できる。こうした学説史研究は、今日における日本語研究に対する自覚的な反省と、今後への展望を与えるものである。また、国際的にも言語思想史的研究学会として著名な、英国ヘンリー・スウィート学会の存在にも見られるように、日本語研究の分野においても、ますます重要性を帯びてくるものと思われる。なお、具体的な研究進捗については、以下各項の通りである。

（１）平田派国学者の言語研究に関する文献学的史料調査

太政官制発足から学制が頒布された明治５年までの間で刊行された、権田直助をはじめとする明治期国学者の言語研究書等について、語彙項目や文法学説の精査を通して、時系列的に分析を行った。具体的には、明治後期に至ってほとんど省みられることのなくなった音義書群の系統的分類を行うべく、国学・和学系文献を多く所蔵する大学（國學院大学、皇學館大学）、国立国語研究所、国立国会図書館等所蔵文献から実施する。本調査では、特に大学所蔵文献については悉皆調査を旨とした。

（２）地方国学者の言語研究に関する文献学的史料調査

主として明治２０年代を中心に、各地方で多く出現する本居宣長・本居春庭ら鈴屋門流の著述の再刊やそれらの注釈について、当時の文語文法教科書等との対比をふまえた精査を通して、その特質の分析を行った。具体的には、前年度に引き続き、国学者の著述群の系統的分類を行うべく、旧師範学校系大学（筑波大学、広島大学等）、国立公文書館、本居宣長記念館等所蔵文献から実施した。本調査も、特に大学所蔵文献については悉皆調査を旨とした。

（３）大学関係国学者の言語研究に関する文献学的史料調査

近代学知としての「国語学」の成立に至るまでに、多くの知見を提示した明治期国学者の中でも、権田直助、堀秀成、谷千生、落合直文の文法研究や、林甕臣の語源研究等について学説内容を精査し、それらが帝国大学における「国語学」「国文学」の設立に寄与した物集高見、本居豊穎、小中村義象、木村正辞といった国学者らの言語研究とどのような関係にあるのか、また、どのような形で吸収されていったのかという過程について分析を試みると共に、従来看過されていた国語教育や国語施策との関連性について考察を行った。

（４）明治期国学者の日本語学史的検討

前年度までに収集、整理された一次資料をもとに、当時の国語施策や言語観との関係や、国学者の言語研究が果たした役割について、言語思想史的知見を加えながら、学説史的に検討を試みた。具体的には、国学者の言説が国語国字問題や文法教育に与えた影響や、教

育機関での扱い方等について、従来の国学研究史の枠組みにとらわれない形によって分析を試みた。

４．研究成果

富士谷成章や本居宣長、本居春庭といった近世国学者の言語研究については、明治以降の国語学史の研究分野において、すでに多くの研究がなされているものの、近世国学と明治期とを繋ぐ時期の研究については、未だ十分に解明されていない実態が存在すると言えることから、明治期国学者の言語研究について日本語学史的に精査し、その研究史的意味についての検討を試みた。具体的には、明治期国学者の言語研究書等に関する調査との関連から、文法研究の点で大いに注目すべき鈴木朗の『活語断続譜』(東京大学文学部黒川文庫本)の解説と影印覆刻を行った。また、明治期国学者として位置付けることが可能な山田孝雄の文法研究について、学校国文法との関連から検討を行った。なお、検討に際して明治後期に刊行された文法(教科)書群約250点のリストアップを行った。さらに、近世国学者がほとんど言及しなかった漢文訓読の諸問題について、明治期国学者がどのように関係していたのかを、主として国語施策との関連から検討を行った。文献リストについては、明治後期に至ってほとんど省みられることのなくなった音義書群の系統的分類について、国学・和学系文献を多く所蔵する大学の附属図書館(國學院大学、皇學館大学)、国立国語研究所、国立国会図書館等の文献をもとに一部実施した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

１．山東　功、キリシタンの見た日本語、日本語学（明治書院）、29・14、55～63、2010、査読無

２．山東　功、明治二〇年代の学校国文法教科書―落合直文・小中村義象『中等教育日本文典全』について―、言語文化学研究（日本語日本文学編）、5、1-18、2010、査読無

３．山東　功、調べるときの舞台裏、日本語学（明治書院）、29-2、4-12、2010、査読無

４．山東　功、学校国文法の成立と山田孝雄、言語文化学研究(日本語日本文学編)、4、13-33、2009、査読無

〔学会発表〕（計３件）

１．山東　功、「体・用」の別と修飾、ひつじ書房創立20周年記念シンポジウム「連体・連用」を考える、2010.12.19、学習院大学

２．山東　功、明治期国学と国語学、名古屋大学グローバルＣＯＥプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」第９回国際研究集会、2010.9.11、名古屋大学

３．山東　功、山田文法と学校文法、シンポジウム・山田文法の現代的意義、2008.11.29、東北大学

〔図書〕（計２件）

１．斎藤倫明・大木一夫編、山東功他、山田文法の現代的意義、ひつじ書房、2010、（執筆箇所「『日本文法論』の成立」199～216）

２．中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉編、山東功他、「訓読」論―東アジア漢文世界と日本語―、勉誠出版、2008、（執筆箇所「国語施策と訓点語学」201-218）

〔その他〕

１．前田富祺・阿辻哲次編、山東功（項目執筆）、漢字キーワード事典、朝倉書店、2009、（執筆箇所「漢字廃止論」112）

２．山東　功、日本語へのまなざし、出版ニュース、2151、32、2008

３．山東　功、〈解説〉黒川本『活語断続譜』(東京大学文学部国語研究室黒川文庫蔵)、文莫、30、33-38、2008、査読有

６．研究組織

(1)研究代表者

山東　功（SANTO ISAO）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：10326241